Ⅰ．平成７年度事業の概要

1．全体概要

昭和60年４月に設立された本センターは、平成７年３月をもって10年が経過した。この間、大規模公共開発事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行なうとともに、発掘調査報告書を作成し、10年間に発掘調査した総面積は約56万㎡、刊行した調査報告書は62冊に及んでいる。また、埋蔵文化財展・講演会の開催、「埋蔵文化財情報」・広報紙「埋蔵文化財愛知」の発行など埋蔵文化財保護思想の普及・啓発活動を行ってきた。

今年度、センター創立十周年を記念する各種事業を実施することになり、センターの前身である㈶愛知県教育サービスセンター埋蔵文化財調査部の時代から継続して発掘調査を実施した朝日遺跡を統一テーマとし、小学生から考古学の研究者に至るまでの幅広い層を対象にした「講座」、「埋蔵文化財展」、「親子の考古学教室」、「シンポジウム」を企画した。記念事業の内容や参加者については後の普及・啓発活動で触れるが、結果として幅広い層から多くの参加者や見学者があったことから、創立十周年を記念する事業として多くの成果があったと自己分析している。今後はこれまでの十年間に蓄積した知識や経験を基にして、新たな気持ちで埋蔵文化財の調査研究に取り組みたいと考えている。

今年度の発掘調査は７事業・16遺跡で実施し、総面積は87,929㎡に及び、センター発足以来最大の調査面積となった。これは平成２年度から始まった東海北陸自動車道関連の調査が今年度ピークを迎え、その調査面積が71,755㎡となったことによるもので、同関連の調査面積は今年度総調査面積の80％を越すこととなった。また、三河部での発掘調査はなく、尾張北東部に調査が集中する結果となり、これまでになく地域的に偏った状況となった。

整理・報告書は７事業・10遺跡を行ない、そのうち報告書の原稿作成は７遺跡で行なった。今年度から報告書は次年度に印刷する工程に変更したため、７遺跡の報告書の刊行は平成８年度に予定している。

調査課は調査面積の増加にともなって４名の増員となり、２名のプロパー職員を新たに採用、他の２名は学校からの派遣職員で補充した。その結果、調査課は43名となり、管理課７名を合わせるとセンター全体では50名の大所帯となった。

2．発掘調査

発掘調査を実施した16遺跡のうち、西上免遺跡からは東海地方で発掘調査によって初めて全長40mの前方後方墳を検出した。前方後方墳は周溝から出土した土器により築造時期が３世紀中ごろと考えられ、前方後方墳の発生をめぐる新たな問題を提起することとなった。このほかに注目される遺構としては、八王子遺跡の弥生前期と中期の環濠、朝日遺跡の19基の古墳群、門間沼遺跡・大毛池田遺跡の古墳前期の水田跡などがある。

（１）弥生時代～古墳時代

八王子遺跡は発掘調査により弥生前期から鎌倉・室町時代に至るまで継続して営まれていることが判明し、検出した主な遺構としては弥生前期の環濠・方形周溝墓、弥生中期の二重環濠・方形周溝墓がある。弥生前期と中期の環濠を同時に検出した例は稀で、弥生時代の尾張北部の拠点集落として注目される遺跡となった。一色青海遺跡では平成５年度から継続的に発掘調査を実施し、今年度の調査

においても弥生中期後葉の竪穴住居・掘立柱建物・方形周溝墓を検出した。また、総調査面積も約2万㎡にも及び、遺跡全体の姿を想定することが可能となった。つまり、遺跡北部には旧河道が蛇行して流れ、その南に弥生中期の居住域が細長く広がり、居住域の東には方形周溝墓群からなる墓域が広がっていることが判明した。朝日遺跡では予測していなかった19基の古墳群を検出した。古墳は一辺の長さが5～8m、隅丸方形状の低いマウンドを持ち、出土遺物から5世紀後半～6世紀前半にかけて造られたと考えている。尾張の沖積地で古墳の群集が発見されることは稀で、古墳時代の朝日遺跡を考える上で貴重な資料となる。西上免遺跡からは全長40mの前方後方墳を検出し、前方後方墳の周溝から出土した土器が廻間II式前半期にまとまりがみられることから、3世紀中葉ごろまでに古墳が造営されていたと考えられる。これまでの調査によって前方後方墳の周辺から4基の墳丘墓、墓域の南から水田跡を検出しており、前方後方墳の発生や3世紀ごろの集落景観の復元などの問題を明らかにすることができる資料となる。門間沼遺跡は昨年の調査で古墳時代の集落跡と円墳を検出し、本年度の調査区はその東側に位置し、広範囲に古墳時代前期の水田跡を確認した。この水田跡は北に隣接する大毛池田遺跡の下面の水田に対応し、堆積状況からは洪水によって埋没したものと考えられる。

（2）古代

大毛池田遺跡では、旧河道と旧河道の西側に平行して走る5条の溝を確認することができた。溝は幅8～10m、深さ2mほどの規模で、一定の間隔をおいて北東から南西方向に直線状に延び、7世紀から9世紀にかけての遺物が出土している。また、溝の一部は門間沼遺跡においても確認していることから、かなり大規模な土木工事が行なわれたものと考えられる。

（3）中世～近世

ＮＡ335号古窯跡群から検出した5基の窯跡のうち、4基は12世紀後半から13世紀前半にかけての灰釉系陶器を生産した古窯で、1基は床面が平坦で円筒形の窯体構造を呈することから炭を生産した可能性を残している。円通寺古墓は近世村絵図に「三昧」と記載されている地点で、試掘調査により土坑墓を確認したため調査に入った。1,500㎡の調査範囲に100基をこす土坑を確認し、土坑の4分の1から人骨が出土し、煙管、寛永通宝、近世陶磁器などを検出した。今後の整理により調査事例が少ない近世の墓制が明らかになるであろう。

3．調査報告書作成・調査研究活動

今年度は7冊の調査報告書の原稿を作成し、『年報　平成7年度』・『埋蔵文化財情報11　平成6年度』の2冊を刊行した。また、東海北陸自動車道関連の調査報告書として、今年度から『北道手遺跡』・『大毛沖遺跡』の2冊の報告書に取りかかった。

『広坪遺跡』ではアカホヤ火山灰の堆積層とともに、縄文早期の押型文土器や中期の土器を報告する。『北道手遺跡』は古墳時代前期に短期間に営まれ、尾張北部地域では類例の少ない遺跡である。出土遺物の検討から美濃地域との関連が強いことが明らかとなった。『大毛沖遺跡』では8世紀から10世紀にかけての土器編年の基準資料となる一括資料を検討し、県内では出土例の稀な木製鐙や鉄製羽釜を報告する。『儀長正楽寺遺跡』は12世紀から13世紀を中心とする居住域で、区画溝による地割りを検討し、奈良時代末から平安時代前期の浄瓶を含む一括資料を報告する。『清洲城下町遺跡』では、城下

町前期の幅10mほどの区画溝について検討を加え、出土遺物のうち90%を越す土師器皿について詳細な分析を試みた。『鳥羽城跡』は丘陵端に築かれた16世紀の山城で、遺物はほとんど出土しなかったが、喰い違い虎口、搦手、土塁、掘立柱建物、曲輪などの遺構を検討する。『烏帽子遺跡』では、製塩を行った可能性のある弥生前期の土器や17世紀後半の横須賀御殿で営まれていた御庭焼きについて報告する。

『年報　平成７年度』には、調査研究編として９本の論文を載せることができた。今後とも調査研究員の意欲的な取り組みにより質の高い論文の掲載を目指していきたい。

４．普及・啓発活動

創立十周年記念事業として実施した埋蔵文化財展は、10月３日から11月30日まで愛知県清洲貝殻山貝塚資料館において「朝日遺跡への招待」をテーマにして開催した。20年余に及ぶ朝日遺跡の調査成果を展示するとともに、逆茂木の復元や自然科学的手法による古環境の復元を行い、期間中に3,075名の見学者があった。講座は全６回で、各回朝日遺跡についてのテーマを決め、司会と講師２名によりテーマについて対談する形式で行い、各回50～54名の参加者があった。親子の考古学教室には小学校５・６年生の児童とその保護者の40組、80名の参加者があった。参加者は２つの日程に分かれ、各３日間で朝日遺跡の体験発掘や土器・石器づくり、土器の野焼きにチャレンジした。また、朝日遺跡の調査過程で考古学的手法に加え自然科学的手法を積極的に取り入れ、かなりの成果があったことから、シンポジウムでは井関弘太郎名古屋大学名誉教授の「朝日遺跡と濃尾平野」の記念講演後、朝日遺跡の紹介、昆虫・珪藻・花粉化石による古環境の復元、朝日遺跡の家畜、土器・石器の生産・交流についての発表があり、総合討論により朝日遺跡の実像に迫った。シンポジウムの参加者は270名であった。

市町村の埋蔵文化財の担当者及び専門職員を対象にした研修会は、昨年度の基礎研修会・専門研修会を研修会（Ⅰ）・（Ⅱ）として、実際に発掘調査が進行している朝日遺跡の調査現場と関連させて実施した。研修会（Ⅰ）では調査現場において「科学分析用サンプル採取の実際」、研修会（Ⅱ）では「朝日遺跡」と縄文時代の「青森県三内丸山遺跡」の紹介後、名古屋大学渡辺誠教授の「縄文時代の食生活」・福岡大学武末助教授の「弥生時代の集落」の講義を計画した。研修会（Ⅰ）が32名、研修会（Ⅱ）が45名の参加者があり、昨年よりも盛況な研修会となった。

現地説明会は、西上免遺跡（尾西市）、一色青海遺跡（稲沢市・中島郡平和町）、八王子遺跡（一宮市）、朝日遺跡（西春日井郡清洲町）の４遺跡で実施した。また、門間沼遺跡（葉栗郡木曽川町）は降雨のため中止したにもかかわらず、来訪者があったため資料を配布した。西上免遺跡では前方後方墳の発見により県内外から2,000名の見学者があり、センター発足以来最も見学者の多い現地説明会となった。一色青海遺跡は７月29日に現地説明会を実施し、250名ほどの参加者があったが、開催時間を午後２時に設定したため最も暑い時間帯となり、暑さで倒れる人がでないかと心配した。尾張沖積地において極めて稀な古墳群を検出した朝日遺跡では発掘調査の途中段階での現地説明会の開催となり、小雨にもかかわらず400名ほどの参加者があった。　（中川真文）